

P2~3	ミニ企画展	新収蔵品展
P4	ミニ企画展	大津仏教文化 14
	ミニ企画展	大津百面相
P5	学芸員のノートから	
P6	収蔵品紹介	

大津歴史博 だより

第104回ミニ企画展

平成24年度 新収蔵品展

平成25年 5月14日(火)～6月9日(日) 【休館日】月曜日



購入1 大津絵 雨宝童子



購入3 流木 柴田晩葉筆

第二〇四回三二企画展

平成二四年度新収蔵品展

■五月一日(火)～六月九日(日)〔休館日〕月曜

歴史博物館では、毎年三企画展コーナーにおいて、新たに収集した資料を紹介する「新収蔵品展」を開催しています。平成二四年度は、希少な古大津絵をはじめ、歌川広重の東海道五拾三次、ご当地日本画家の柴田晩葉、渡辺公観の作品、江戸時代の植林家・餅九蔵の資料など、大津の歴史と文化を語るうえで、大変貴重な資料が新たに加わりました。本展では、大津の様々な歴史の一端を、新収蔵品によって触れていただくとともに、皆様のご家庭に残されている資料についての情報をお寄せいただく契機になれば、幸いです。

〔購入〕

1 大津絵 雨宝童子 一幅 江戸時代(一七世紀)

雨宝童子を描いた希少な大津絵。雨宝童子は、天照大神が日向に下生された時の姿と伝えられる。本作は、現存する大津絵の中でも最古級に属するもので、合羽摺り(型紙摺り)が少なく、肉筆描写が多い点の特徴。また、本紙のサイズも、定番の半紙二枚継より大きい三枚継である。要するに、大津絵スタイルが確立する以前の、手間と材料費をかけていた頃の初期作である。

2 保永堂板 東海道五拾三次 土山 歌川広重画 江戸時代(一九世紀)

保永堂板東海道五拾三次は歌川広重(一七九七―一八五八)の代表作。土山は同シリーズの中でも評価が高く、近江の宿駅の中では最も抒情的な描写となっている。題字の左脇には「春之雨」の印があり、大名行列が春雷の夕立に降られた様子を描いた場面とわかりやすい。

3 流木 柴田晩葉筆 一幅 大正時代

本作は、市内の旧家に伝わった作品。天候の天気の後、打ち寄せられた流木を拾うおばあさん。傍らには、椿の花もたくさん落ちていて、色彩感覚やモチーフの形態描写には、大正時代ならではのモダン感覚が発揮されている一方で、のどかな湖岸の民家の風情がよく伝わるところに、湖国のモダン日本画家・柴田晩葉(一八八五―一九四四)の特徴が発揮されている。

4 丸子船朝敷図 渡辺公観筆 一幅 大正時代

文展で活躍した大津の日本画家・渡辺公観(一八七八―一九三八)が、琵琶湖特有の丸子船を詳細に描いた作品。彼は市内の旧家で、襖絵の大作「丸子船泊図」を手がけているが、本作は、その一場面の縮小版といえる作品。ムシロ掛けの方法や船上の様子が克明に描写されており、近代における丸子船の様使用実態ならびに船容をうかがう上で興味深い作品。

〔受贈〕

1 月下漁舟図 柴田晩葉筆 一幅 大正時代

川霧が立ち込める早朝の情景だろうか。鎌なりの三日月は空低く、生い茂る樹木のもとには沼沢が広がり、浮かぶ小舟で独り漁夫が釣糸を垂れる。農夫や漁夫の生業の営みを、印象的な情景として描くことを好んだ晩葉らしい作品。

2 青楓飛瀑図、紅葉小禽図、花鳥・雑画色紙 柴田晩葉筆 大正・昭和

晩葉の遺作には、四季花鳥の色紙や、歳時記的に日常風景を描いた色紙や掛軸が多くみられる。彼は、地元大津で開催された作品頒布会や席上揮毫会などを通じて、日常の床掛けに向けた作品を市民に提供していた。

3 餅九蔵関係資料 一括 江戸・明治時代

餅九蔵とは大の餅好きによる通称。本姓は加藤氏。享保十六年(一七三一)に膳所木ノ下村に生まれ、明和六年(一七六九)に藩主に召されて山番を命ぜられ、以後、独力で荒地を開墾して杉苗を植樹し続けた。文化三年(一八〇六)に職を退いた時には、二五町歩、数万本に及び、経過を知らなかった上層部を驚かせたという。本資料は、九蔵の由来書をはじめとする、地域・植林史・治水史の重要資料である。

4 昭和天皇御大典記念 国旗盃 昭和三年(一九二八)

昭和天皇御大典記念として製作された盃。盃の高台裏には「昭和三年 御大典」と記されている。杯台は風にたなびく国旗の白地がかたどられ、盃の見込みには日の丸が赤絵で上絵付けされ、杯台に盃を置くと、日章旗に見えるよう、工夫されている。盃の内高台には京都の窯元である「菊溪」の印銘が入っている。

5 富山売薬置薬箱 昭和(戦前)

富山の売りの商いは、あらかじめ各家庭に薬箱を置き、使用した分の料金を徴収し、薬を補充するという方法で評判を呼んだ。彼らは大きな風呂敷に荷物を背負って、各家庭を訪問し、紙風船のオマケを子供たちに渡した。戦前の市民生活の様子を物語る貴重な歴史資料。



購入 4 丸子船朝敦図 渡辺公観筆



購入 2 保永堂板 東海道五十三次 土山 歌川広重画



受贈 3 餅九蔵関係資料



受贈 2 青楓飛瀑図・紅葉小禽図 柴田晩葉筆



受贈 1 月下漁舟図 柴田晩葉筆



受贈 5 富山売菓置菓箱



受贈 4 昭和天皇御大典記念 国旗盃



受贈 2 花鳥色紙 柴田晩葉筆



受贈 2 雑画色紙 柴田晩葉筆

大津の仏教文化14

重要文化財 大練寺の十六羅漢図



会期：6月11日(火)～6月30日(日)

大津の豊かな仏教文化を紹介するミニ企画展「大津の仏教文化」シリーズの14回目。今回は、三井寺町にある大練寺（がいれんじ）に伝来する絹本著色十六羅漢図（じゅうろくわんず）を展示します。大練寺は、文禄元年（1592）に格翁（かくおう）が開基となりつくられた曹洞宗寺院です。数々の宝物がある中、十六羅漢図は全16幅のうち12幅が鎌倉時代の制作となり、重要文化財に指定されています。本画は通常、保存のために京都国立博物館で保管され、なかなか市民の方々が目にすることが出来ません。本展では、いままでも大津で紹介されることのなかった本画を、地元の当館で初めて展示します。

大津絵百面相

—画家たちのゆかいな大津絵—



六種大津絵図 富田溪仙 白澤庵蔵

会期：7月2日(火)～8月11日(日)

街道の土産物・大津絵は、何を隠そう、旅人たち以上に、円山応挙、池大雅、紀楳亭ら上方の絵師たちや、歌川広重・国芳ら江戸の浮世絵師たちに大人気のキャラクターでした。その絵師たちの人気も、明治時代の街道と大津絵の衰退とともに、一旦は下火になります。しかし、大正年間に柳宗悦が、民芸運動を展開する中で、大津絵を大絶賛すると、今度は近代日本画家たちの間で、とりわけ、竹内栖鳳や門下の橋本関雪をはじめ、京都画壇の日本画家を中心に、岸田劉生など一部の洋画家までも虜にし、我流の大津絵作品を描き、その面白さを競い合うことが流行しました。本展では、遊び心にあふれた楽しい彼らの絵変り大津絵の世界を紹介します。

お寺のお蔵は「謎のタイムカプセル」—西教寺のアイヌ資料—



アイヌ人（男性）図



蝦夷地図

紙本彩色蝦夷古記（部分） 1巻 江戸時代 西教寺蔵

大津市内には沢山のお寺が所在し、それぞれに蔵があります。その中には、仏画や経典、仏具など宗派に関するものもあれば、中には全く関わりがなさそうなものも含まれています。例えば、大津市坂本の天台真盛宗の総本山、西教寺には、『蝦夷古記』という卷子状の資料があります。名前からして「蝦夷（現、北海道）」ですから、西教寺と直接的な関係は想像できないものです。

さてこの『蝦夷古記』、この分野に詳しい北海道開拓記念館の学芸員さんのご助力により、現在、東京国立博物館に所蔵されている『蝦夷島奇観』と実は同類のものであることが分かりました。これは、幕府の役人である秦檜麿（村上島之允）が蝦夷地の地理や風俗を記したもので、寛政12年（1800）に完成して幕府に提出したという資料です。中を見ると、昔の北海道と千島列島の地図や、アイヌ人の様々な風俗画などが描かれており、興味の尽きない内容となっています。西教寺本は、全体のボリュームは東博本よりは少ないものの、絵や文字は東博本とほぼ共通しています。不思議なのは東博本にはない「ねもろ（根室）」の図があることと、年号が寛政11年（1799）と、東博本より一年早いことで、制作背景にいろいろと謎がありそうです。

そんな本画がなぜ大津の西教寺に伝来したのかは今のところ分かりません。ですが、宗派と関係なさそうなものでも、何百年も大事に保存しているのがお寺の蔵です。現在日本には膨大な量の文化財が伝世していますが、そのほとんどがお寺や神社の蔵に残っていたものです。宗教的に守護されたこの蔵の伝世能力こそ、わが国の誇るべき保存システムです。時には思いもよらないものがあったりして、何が入っているかわからない「謎のタイムカプセル」なのです。

まさか大津のお寺にアイヌの人たちを描いた資料があるとはだれも想像しないでしょう。因縁とは不思議なものです。普通の仏像研究者だったら全く意に介さないであろうこの資料、たまたま見た私が北海道出身であったため偶然に記憶され、今回、蔵から目覚めることになったのです。

学芸員がお寺のカプセルを開ける機会も、作例が世に出てくるタイミングも、様々な縁と偶然が重なっているのです。

（本館学芸員 寺島典人）

200年前に開催された、故人を偲ぶ粋な供養（興行？）

皆川淇園七回忌追善寄合図 山口素絢ほか全16名 文化10年（1813）1幅 本館蔵

メディアで報じられる、現代の有名人や名士の葬儀を見ると、盛大なセレモニーであることに圧倒されますが、江戸時代は、葬儀のみならず、故人を偲んで、節目の忌日に粋な追善供養を開催することが文化人における重要な催事？でした。しかも、被供養者が、京を代表する人気文化人であった皆川淇園（1734-1807）だとなおさらです。ちなみに淇園は、膳所藩の藩校設立や藩士の教学に功績を残した儒者でもあります。そして本作は、皆川淇園の七回忌にあたって席上揮毫された寄合描きなのです。画面下に息子^{まこと}の允が認めた識語があり、それによると、淇園の七回忌日である文化10年（1813）5月16日に先立つ3月16日に、京の寺町今出川上ルの阿弥陀寺に建つ淇園の大墓碑（墓碑銘は本多康禎揮毫）の前で追善の「祭事」が挙行されました。平成25年から、ちょうど200年前です。当日は、膳所藩主の君命で家老の村松氏が藩主名代で焼香するなど盛大であったようです。中でも注目は、淇園ゆかりの画工（絵師・画人）が「数十輩」も参列し、各自が自作を霊前に「奠^{てん}せん^{ぜん}薦」した（供えた）ことです。淇園の位牌を囲んで、錚々たる京派絵師たちの名品展がお堂にて展覧される。まさに淇園にふさわしい追善供養といえます。そして、本作は、その展覧のシメなのです。参列者の焼香後、淇園在世時の文化サロンを再現して、故人を追慕しようという発案で、席上揮毫による寄合描きパフォーマンスが興行されました。揮毫者は、当時の京を代表する流派の宗家や高弟たち（淇園と親しかった円山応挙の門弟が多い）。彼らが氷列（裂）に分割された不定形なコマに、見事に即興で描きこんでいます。その数、全16名。中央の無落款の若松は皆川允と思われる。次々に揮毫する絵師たちに参列者が感嘆の声を上げる。その盛り上がりこそ最高の供養だったのです。

（横谷賢一郎）



※皆川允に続く揮毫絵師は、右下から左下の順に、狩野永俊、山口素絢、西村椿亭、円山応震、奥文鳴、原在明、八田吉秀、河村崎鳳、岸岱、円山応瑞、土岐清美、（若松）、佐々木大寿、岡本豊彦、松村景文、長澤蘆洲

ご利用案内



- 交通機関
 - ・京阪電鉄石坂線別所駅 徒歩5分
 - ・JR 大津京駅 徒歩15分
 - ・JR 大津駅、バス10分別所下車
- 駐車場 約70台（無料）

■常設展示観覧料

区分	個人	団体 <small>30名以上</small>
一般	210円	160円
高校生・大学生	150円	120円
小学生・中学生	100円	80円

- ◆大津市内在住の65歳以上の方、市内在住の障害者の方は無料。
- ◆土曜日に限り、小・中学生は無料。
- ◆ミニ企画展は、実費観覧料でのご案内いただけます。
- ◆企画展の観覧料については、その都度定めます。

■開館時間

午前9時～午後5時（展示室への入場は午後4時30分まで）

■休館日

月曜日（祝日・振替休日の場合は開館し、翌日が休館）
 祝日の翌日（土・日曜日の場合は開館）
 年末年始（12月27日～1月5日）
 その他、業務の都合により休館する場合があります。

—— 歴博カードのご案内 ——

当館主催の展覧会を自由にご観覧いただける定期観覧券です。また、当館発行の出版物や催し物の割引、様々な情報のご案内など、多くの特典を設けております。（1年間有効）

料金	一般	高大学	小中学
	2,000円	1,500円	1,000円

★詳しくは博物館までお問い合わせ下さい。



大津市歴史博物館

〒520-0037 滋賀県大津市御陵町2番2号
 TEL 077-521-2100 FAX 077-521-2666
<http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

大津歴博だより No.90 平成25年5月10日